

去る5月29日、当法人の定期総会を実施しました。今期も前期に続き新型コロナウイルス感染症対策のため、事前評決のうえオンラインでの開催となりました。

皆様のご支援もあって、充実した活動を行うことができております。いつもありがとうございます。当法人において皆様からのご支援で活動している「下宿事業」や「短期居住事業」、「フードバンク活動」などを行う共生事業部についての内容を抜粋して、ご報告します。

■2021年度 共生事業部 活動報告

本年度、下宿事業（W i t h）、短期居住支援事業（J I K K A）、来店型フードバンク（くろーばーマーケット）の3事業を法人の共生事業部として実施することとなった。

「生活に困難を抱える人」がより深刻な状況に陥らないために何ができるのかを考えながら、事業部会、外部の委員を招いた運営委員会を実施し、概ね計画通りに事業実施することができた。

経営的な視点から見ると、収入構造のないフードバンク事業、利用料収入（減免もあり）だけの居住支援事業が中心の共生事業部の運営は寄付金と民間助成金の獲得が大きく影響する。本年度は、クラウドファンディングでの寄付（228.5万円）や外部寄付（60万円）、WAM助成（326万円）、赤い羽根共同募金（286万円）となっている。このため昨年度総会で承認された小規模保育事業からの資金移行を受けずに運営することができた。

事業面では、下宿事業と短期居住支援事業からなる居住支援、フードバンク事業の2つの活動が年間通じて実施された。兼務ではあるが、それぞれに事業責任者を置くことでスタートし、少しずつ事業の中身の進化がみられた。

また、赤い羽根共同募金助成によって、コーディネーターを設置したことで、それぞれの事業の連携や整理が進んだ。この連携の中で新しく「J I K K A便」がスタートし、現在2団体から紹介を受けた社会的養護出身者など約20名に毎月フードバンクの食品+αを送っている。

赤い羽根助成開始前の事業検証の中で、一人暮らし体験「いちご」という名称で、これまで「下宿やW i t h」の入居予定者向けに実施していた「お試し宿泊」を初めて一人暮らしをする社会的養護退所者に対象を広げ広く募集することとした。地域の養護施設連絡会で広報したが、時期が遅かったこともあり、利用は次年度入居予定者のみであった。

J I K K Aは、部屋数に比べて入所の問い合わせの方が多く、ほとんどはお断りする状況が続いた。また、満室が続くことで当初イメージしていた緊急な宿泊対応ができないことについて検討し、後半になって、J I K K A 2として民間マンションの1室をサブリースで提

供するようになった。様々な予期しない出来事が続くが、実情に合わせて柔軟にかつスピーディーに対応できたことは良かったと思う。

フードバンク会場でDV相談を受けていた利用者を急遽空き室で保護し、警察経由でシェルター保護につなぐことができた。共生事業部間の連携が有効に働いたケースとなった。また、居住支援や下宿の利用者が自らフードバンクに登録し利用者となることで食の支援や地域参加の機会となった。他地域から短期居住支援の利用に至ったシングルマザーはフードバンクのスタッフとなる事で、友人や地域情報を得ることができて地域定着につながった。

新たな取り組みとしては、今年度の短期居住支援の実践から見えた課題への対応を中心とした、企画提案を行い、生活クラブ生協旭センターの旧職員寮を利用したケア付シェアハウスの検討P j t. がスタートすることになった。コロナ感染以降、社会の中で顕著となっている女性の居住の貧困に対しての活動が法人の枠を超えて広がったことは大きな成果だといえる。

また、一昨年、支援事業部内のP j t. から答申をうけた、多様な人が参加できる「居場所」をJ I K K Aと連携しながら宿泊機能付きで開設する企画を日本財団助成に申請し、採択された。学童クラブと共生事業部の法人内協働で実施する予定である。

本年度スタートした共生事業であるが、制度外の諸事業で様々な新しいネットワークが形成することができること、事業活動そのものの必要性が強いことから継続していくことが大切な事業部となっている。事業内容としては、ある意味、法人のN P Oとしての価値が見える化された事業部である。この事業部の人材、資金を含めて法人内でどう位置付け、法人職員の参加を広げていくかが今後の課題となっている。

《下宿やW i t h》

目的

社会的養護の下で育った女子学生が安心して学生生活を送れるよう安価で安全で安心な住まいの提供と適度な見守りとサポートを行う

新しい建物に引っ越し、新たに2名の学生を迎えてスタートした。以前の場所と違い、気にかけていないと姿を見ることもなく、普段の様子が全く見えなくなってしまった。ボランティアで掃除や夕食づくりに協力してくれている職員と時々コミュニケーションをとることで何か困ったことが起きていないかを共有してきた。

また、昨年度“気軽な会話や困っていることを話せる関係“ができていなかったのではないかと課題が残ったため、今年度は夕食づくりに、ある程度決まった人が入るように意

識し声をかけるように心がけた。関係づくりに重きを置くことはできたが、それゆえに法人内の人たちを広く巻き込んでいくことが出来ていないことに課題がある。

入居や卒業等折に触れて関係者が集まることで、近況報告や情報交換、関係づくりを行ってきたが、コロナの影響で今年もその機会を作ることが出来ず、メールや電話でのやり取りをできるだけ丁寧に行った。ちょうどコロナが始まると同時に入学を迎えた3人の学生生活は、3人との会話からも様々な経験の機会を奪われてしまったのだと感じる。

夏を過ぎてボランティアとの関係ができてくると、夕食の献立を尋ねたり、学生同士がリビングで談笑する姿が見られるようになった。

ホームカミングデーを夏に企画したが、コロナ感染拡大のため2度の延期となり今年度は開催が出来なかった。

予備室を利用し一人暮らし体験ができる「いちご」は、1件問い合わせがあった。

《居住支援事業J I K K A》

目的

1. 住居の困窮にある人たちに短期間（3～6）か月安心して生活ができる場を提供する。
2. 安全で安心できる住まいと次に向かう準備をする場を提供する。

2021年4月～5月 居住の場の整備

2021年6月 入居開始

2022年10月 中期シェアハウス開始(生活保護申請援助・フードバンクへの繋ぎ、参加の場の提供)

入居者数 延べ7名

年齢 18～42歳（42歳以外は20代前半の若者）

平均滞在期間 4か月

退所移行先 自立援助ホーム(1名) アパート(3名) 中期シェア(1名)

滞在中(2名)

予想以上に反響や問い合わせが多く、部屋が空くことなく通年居住の提供を行うことができ、この分野の必要性が見えた。しかし、当初イメージしていた「もうひとつの実家」機能や予防的な利用ではなく、多様な困難を抱えた人の最後の綱としての利用が多かった。

赤い羽根助成をうけて、ソーシャルワーク機能の強化や多様な連携模索を行った結果、1年間であるが、事業の総体を見えるようにできたと思う。

利用者ごとの個性もあり、個別対応を重ね少しずつ信頼関係をつくってきた1年間であった。

入居まで支援をしてきた団体との関係が生まれ、これまでと違ったネットワークが構築で

き、連携した支援の提供ができた。

居住支援の必要性の発信や提案から、生活クラブとの共同での新しい拠点づくり構想がスタートできた。

法人職員からの家賃分寄附やフードドライブの呼びかけを行い、賛同者からの寄付を得ることができ、事業色が強くなりがちな法人内にNPOらしさを広める効果はあった。

《くろーばーマーケット》

目的

1. 子育て層（お福分けの会）から地域の方へ
2. 利用者の意思を尊重したフードバンクへ
3. ゆるやかな相談機能のある場所

2021年6月スタート

開所日数 79日（年末年始、土日祝日を除く週2回）

来店型フードバンクとして、食品、日用品の提供を行った。

■登録者数 91名

■利用者数 1,706名（月平均171名）

■属性（世帯） ・ひとり親54名 ・障がい4名 ・外国籍3名
・その他（貧困、高齢、大家族）26名

利用者だけでなく、提供団体も地域の店舗や作業所からのパンの提供も始まり「地域とのつながり」が拡がりはじめた。

また、利用者の「すぐに食べられるもの」というニーズもあり、炊いたご飯、野菜や果物の提供も行った。

提供団体だけでなく、法人内で集まった多くの寄付品を持って帰れる「0円バザー」を開催したが、日用品や学習用品、礼服が好評だった。

防災食を使ったレシピ、ポップを貼って商品をすすめたりして、賞味期限切れによる廃棄を減らすようにした。提供してくれた品物と一緒にコーナーを作ったり、Facebookにあげて提供団体や事業所を利用者に紹介した。

お福分けの会や法人内、他団体からの利用者だけでなく、SNSからの問い合わせ、利用者からの紹介や「食に困っている」という直接の問い合わせが増えており、地域での利用者の広がりができた。

利用者自身で品物を選ぶことができるので、利用者の主体性を尊重することができた。また、スタッフ自身が生活困窮者だったこともあり、利用者とのコミュニケーションの中で、背景、

生活状況、家庭状況などを知ることができ、様子が心配な親子等にはスタッフとともに見守りや対応を検討した。DV被害が疑われていた家庭の親子は、警察経由で母子生活支援センターへの入所や児童家庭支援センターへ繋ぐことができた。

収入の見通しが難しいため、助成金の申請や運営スタッフを雇用ではない方法も検討、法人内フードドライブの提供品を増やすための工夫等を考える必要がある。

《 J I K K A 便 》

目的

1. 食品や生活雑貨などの贈り物を通じて、既にある「繋がり」を維持し育て、生活にほんの少しのいろどりを沿える
2. フードバンクを活用したアウトリーチ事業

2021年11月から毎月一度、社会的養護施設出身者に「すでにある関係性」を糸口として、19名に食品+生活雑貨+ミニコミ誌を贈った。

4カ月に一度スペシャル便として、支援者からの手紙を同封した。

毎月、ミニコミ誌への投稿や「必要なもの、あったら嬉しいもの」などを記入してもらう返信用はがきを同封している。11月の発送から少しずつ戻ってくるハガキが増え、子どもがいることで必要なもの、贈られて困るものなどを知ることができた。また、スペシャル便では、季節のものなどを入れ、J I K K A 便のコンセプトでもある「実家からときどき届く荷物」らしさが出せた。

4カ月に一度の出身施設の支援者からの手紙が同封されることによって、退所者へのアフターケアの一環とし、繋がった関係を維持している。また、荷物の受け取りができていないことを把握できるため、不在が続いていることを支援者に伝えることで、支援者が対応したり近況を知ることができている。

《 いちご(一期一会) 》

目的

社会的養護が必要な環境で育った若者に、一人暮らしや共同生活の場で生活体験や練習をする機会を提供することで、巣立ちに向けた判断や準備をサポートする

2021年12月16日 県見学

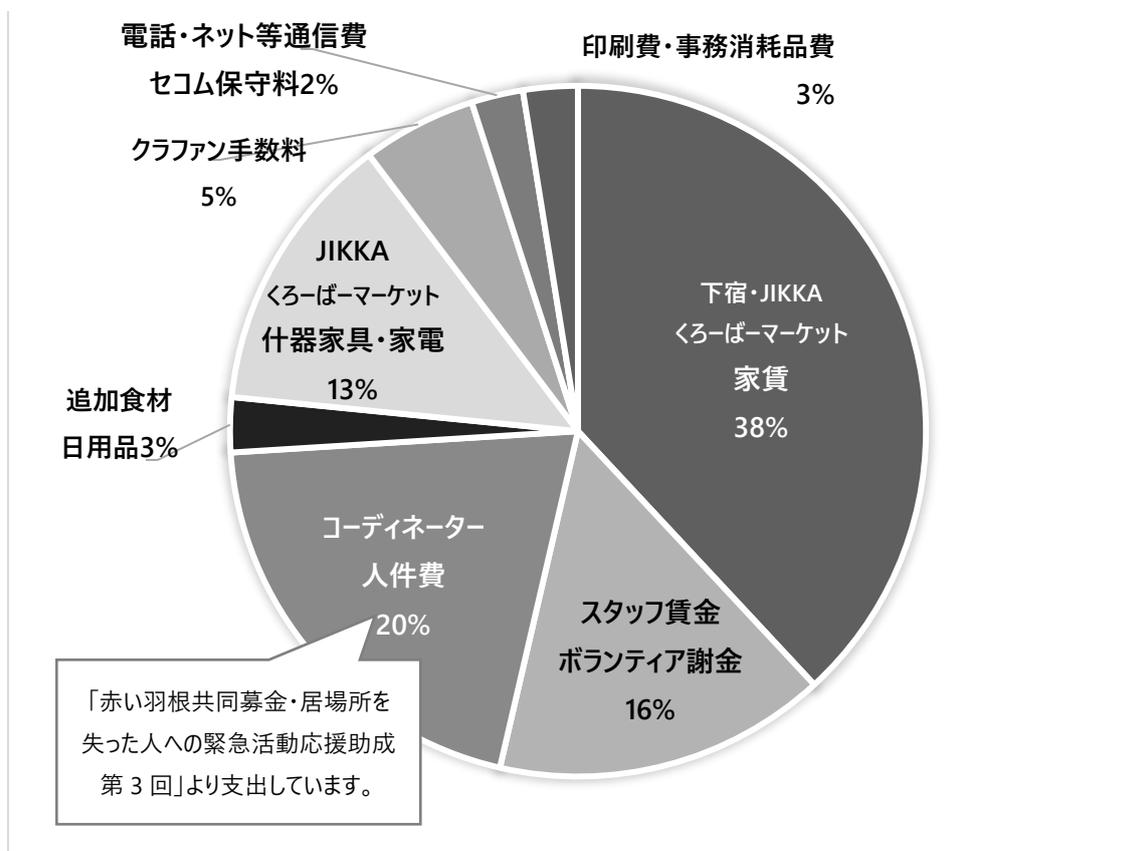
12月17日 小田原連絡会 口頭での説明

アフターケアに関わる方の会議で告知の時間をいただく

他、すでに繋がりのある児童養護施設等にチラシを渡す、HPやSNSで広報

動き出したのが12月と遅かったため、つながりのある養護施設からの問い合わせが1件のみで、今年度卒業にあたっての実施には至らなかった。下宿、JIKKAと分けずに、一つの居住支援事業として利用者の利用目的に沿って、交流重視型と自立型と分け宿泊施設をコーディネートできるようにした。

2021年度 共生事業部 支出内訳（支出合計 10,704,542円）



助成金・補助金、クラウドファンディング・その他ご寄附の際に用途を希望されたものは当該事業にのみ使用しています。

※さくらんぼ全体の決算については、法人ホームページに掲載しております。ぜひご覧ください。



■2021年度 共生事業部 活動方針

1. 共生事業の活動が法人職員に理解され、法人内でしっかりと位置付けられたものとしていきます。
2. 法人内部だけでなく他団体と連携をとりながら、暮らしの中にある課題にチャレンジしていきます。
3. 実践の経過の記録に力をいれて、取り組みの必要性を積極的に発信していきます。
4. 居住支援事業、フードバンク事業を継続実施し、その内実を高めていきます。

《居住支援事業》

1. 「福祉」と「自立」の間にあるニーズに対応していきます。

■親を頼れない女子学生のための「下宿屋WITH」

- (1) 入居学生同士を繋ぎ適度な距離を保って自立のサポートをしていきます
- (2) 利用者の学生生活を支える仲間を法人内に広げていきます

■短期居住支援「JIKKA」

- (1) 利用者ひとりひとりの状況にあった対応を行います。
- (2) これまで支援してきた団体との事前の話し合いを強化します
- (3) 利用者との日常のコミュニケーションを大切にします

■一人暮らしトライアル「いちご」

1. 二つの居住支援を一体として、ニーズに合った居室の提供を行います
2. 緊急利用や一時利用のために一部屋の予備室を確保しておきます
3. 利用するひとりひとりに力があることを信じて対応を重ねます

■生活クラブ旭センターの職員寮を活用した居住の場づくりに主体的に参加し、新たな支援提供の場を生み出し運営します

2. 日本財団の助成事業である「宿泊機能付き若者の夜の居場所事業」をネストキッズ学童と協働して実施します。
3. 必要な人に居住の提供ができるように情報発信を積極的に行います。
4. 居住支援の取り組みが法人以外にも広がるように

- (1) 実践の記録を行い先駆的な取り組みとして発表していきます。
- (2) 他団体との協働を積極的に行っていきます。

5. 法人内での情報発信や協力者の発掘を積極的に行います。

≪フードバンク事業≫

1. 困窮している人たちの食への不安をやわらげます。
2. フードバンク会場での会話や相談に力をいれて困難の深刻化を防ぐ場所となります。

■くろーばーマーケット

来店型フードバンクを継続し、地域に困った時に訪れる場を維持します。

- (1) 利用者の意思で選択する自由のあるフードバンクを目指します。
- (2) 地域に賛同者を増やすことで、提供品の種類を増やしていきます。
- (3) 会場での会話や相談対応を意識して行いながら、必要に応じて法人内他事業や他機関と連携して、問題の深刻化を予防します。
- (4) 0円バザーを季節ごとに行い、食品以外の提供やゆずりあいのきっかけとしていきます。
- (5) ボランティア（有償）主体での活動にシフトしていきます。

■J I K K A便

- (1) 頼る所の少ない若者に対して、実家から届く荷物をコンセプトとしてフードバンク食品や雑貨を毎月送ります。
- (2) 社会的養護やアフターケア団体と連携して、今ある関係を維持し、孤立を防ぐための道具であるように実施していきます。

■ 法人内フードドライブを丁寧に実施し法人内に理解をひろめていきます。

提供された寄附品は、くろーばーマーケットやJ I K K A便に有効に使用し、提供者へのフィードバックを丁寧に行います。

内容

◇日 時 2022年4月1日～2023年3月31日

◇場 所 横浜市瀬谷区三ツ境 17-1、100-6

◇従業員数 9人 ボランティア4名

◇この事業にかかる支出見込み額 13,007,000円

◇職員体制

下宿担当・ひとり暮らしトリアル事業 ◎宮本 颯田

短期居住支援「J I K K A」 ◎伊藤 小桑 坂本

生活クラブ共同事業 ◎伊藤 小桑 宮本

日本財団助成事業 ◎大津 伊藤

くろーばーマーケット ◎坂本 小桑

パートスタッフ2名 有償ボランティアスタッフ2名

J I K K A便 小桑 坂本

継続支援のお願い

いつもお力添えをありがとうございます。今年度も職員一同、充実した活動を進めてまいります。
引き続きご支援をいただけましたら幸甚です。

2022年7月吉日



特定非営利活動法人さくらんぼ

理事長 宮本 早苗

246-0022 横浜市瀬谷区三ツ境 17-1 日栄食品(株)三ツ境ビル

TEL:045-367-7224

FAX:045-367-7660

E-mail : voice@sakuranbo.or.jp